

第十三章 役員 の 活躍

一 重役陣の更迭

昭和のはじめごろ、重役陣の変動がしばしば行われた。先ずその初めは、大正十五年一月一日、専務取締役松下領三の自動車事故による逝去に端を発した。即ち、わが国民にとっては、伝統的に守られて来た目出度い年の始めの祝日が、松下に対する最悪の厄日となったのであった。新年祝賀式を済めた帰りがけ、通三丁目市電停留所で、東京乗合自動車のバスに撥ねられ、手当の甲斐もなく即日死去した。原因は泥酔していた運転手の過失によるもので、同社は深く遺憾の意を表し、慰藉料を贈って弔意を表した。しかし松下夫人はこれを辞退し、むしろその金子を以って、本社前の電車停留所に安全地帯をつくり、今後こうしたいたましい災害が再び起らないようにして欲しいと申出た。バス会社は直ちにこの提言をいれ、本社前の停留所に安全地帯を設置した。今は路線が廃止されている銀座線であるからその跡さえ見られないが、四十有余年の永い間、激しい交通地獄から乗客の命を守りつづけた功績は偉大であり、松下遺族の其拳は、秘話としても東京都交通史に止めておき度いものである。

松下領三は、大正八年一月、山崎信興が社長に就任した時、専務取締役の職につき、爾来相扶けて丸善の発展に精力的な活躍をつづけて来た。今丸善に於ける彼の経歴を拾って見ると、明治四十一年東京帝国大学法学部卒業、

同年八月十一日丸善株式会社に入社、明治四十四年十月十一日仕入課長として商業視察のため欧州へ出張、大正二年一月二十一日帰朝、大正五年一月二十四日取締役に就任、大正八年一月二十四日専務取締役に就任、となっている。さて、重役陣の移動について松下の死後の状況を見ると、取締役の定数は従来六名であったが、松下の死去に伴い一名の欠員を見、昭和二年の満期改選の時には、五名がそのまま重任し、取締役の補充を行わなかった。このうち斎藤定四郎も又昭和二年七月十七日死亡したので、本店副支配人兼書籍部長の八田庄治が、同年八月二十四日取締役に選任された。次で昭和四年八月二十四日取締役を一名増員して再び六名となし、監査役鈴木仁一郎が新たに取締役に就任し、昭和五年二月の満期改選に際しては更に取締役を一名増員して七名となし、従来の六人の外に新たに監査役松下末三郎が取締役に就任した。然し翌六年一月十三日松下末三郎が、四月五日には松下包次郎が歿したが、この二人の補欠選挙は行わず、昭和十一年二月に至るまで取締役は五人のままであった。次いで昭和十一年二月の満期改選期に至り右五人の外監査役であった金原巳三郎が新たに取締役に就任し、取締役は六人となった。尚、松下領三の死後山崎社長が専務取締役を兼ね、暫く専務取締役は置かれなかったが、昭和五年二月二十四日、取締役八田庄治が新たに専務取締役に就任した。

監査役の定数も、昭和三年二月迄は二名で、鈴木仁一郎と金原巳三郎の二人が、引きつづき重任してその責に任じたが、満期改選に当り定数を三名に増し、松下末三郎が新たに監査役となった。この中鈴木仁一郎は、昭和四年八月二十四日に、松下末三郎は、昭和五年二月二十四日に、それぞれ取締役に転任し、新たに小柳津宗吾が昭和五年二月二十四日監査役に選任され、金原巳三郎と二人でその衝に当たった。

二 海外商情の視察

こうした首脳陣の更新・強化は云うまでもなく世界的不況のあおりを喰った我が国の商業、特に消費経済にたよった丸善の商売を一新し、体勢を挽回することにあつた。つまり国内の需要に依存して、輸入一辺倒に傾いていた消極的商法を転換し、海外に新市場を開拓して積極的に進出を計ることであつた。そして此の試みの現われとして行われたのが、

海外派遣旅商団への参加

海外商業視察員の派遣

の二つであつた。先ず前者について見ると、大正十五年、商工省では我が国の貿易振興を図る目的で、代表的実業家二十名を選出して旅商団を組織せしめ、之に補助金を与えて世界各国に派遣することを考え、その人選を各組合に委嘱した。そこで東京実業組合連合会では、東京文具業界の代表として、丸善のインキ部長杉浦疇を推薦した。丸善は双手を挙げてこの企画に賛同していたから、杉浦に声援を送ってその行を盛んにした。杉浦は旅商団第一班に参加したが、この班は杉浦の他左の三人計四人から成っていた。即ち

名古屋綿織物業界代表 中村吉造

大阪琺瑯鉄器業界代表 広瀬新市

大阪雜貨業界代表 水落慶雄

で、一行は主として東亜各地に販路を広めるのが目的で、大正十五年八月十九日伏見丸に乗船して神戸を出港した。一行は先ずインドシナに渡り、その後北上して満州にまで達し、昭和二年三月二十五日に帰朝した。見本市を開い

た各主要都市は次の通りである。

盤谷	大正十五年九月十五日～十九日
西貢	同年 十月八日～十三日
河内	同年 十一月八日～九日
海防	同年 十一月十三日～十五日
香港	同年 十一月三十日～十二月一日
広東	同年 十二月六日～七日
上海	同年 十二月二十三、二十四日
天津	昭和二年一月二十一日～二十五日
青島	同年 一月二十九日～三十一日
大連	同年 二月十三日～十五日
ハルビン	同年 二月二十四日～二十七日
長春	同年 三月八日、九日
奉天	同年 三月十五日～十七日

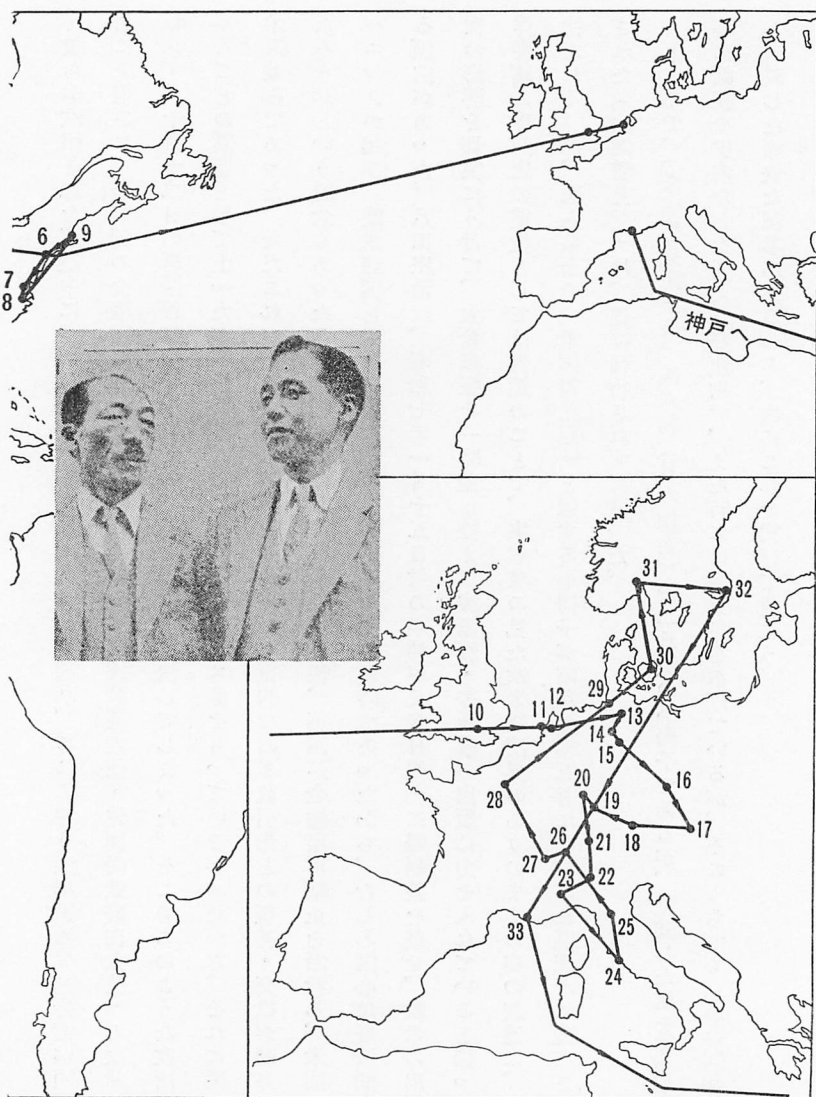
この旅商団の派遣は相当の成績を収め、丸善文具類の海外進出にも大いに役立った。尚、各地の見本市の状況については、「日本商工省後援旅商第一班文具代表杉浦囁報告書」(昭和二年七月東京市文具卸商同業組合出版)に委しい。

三 「米 国 瞥 見 記」

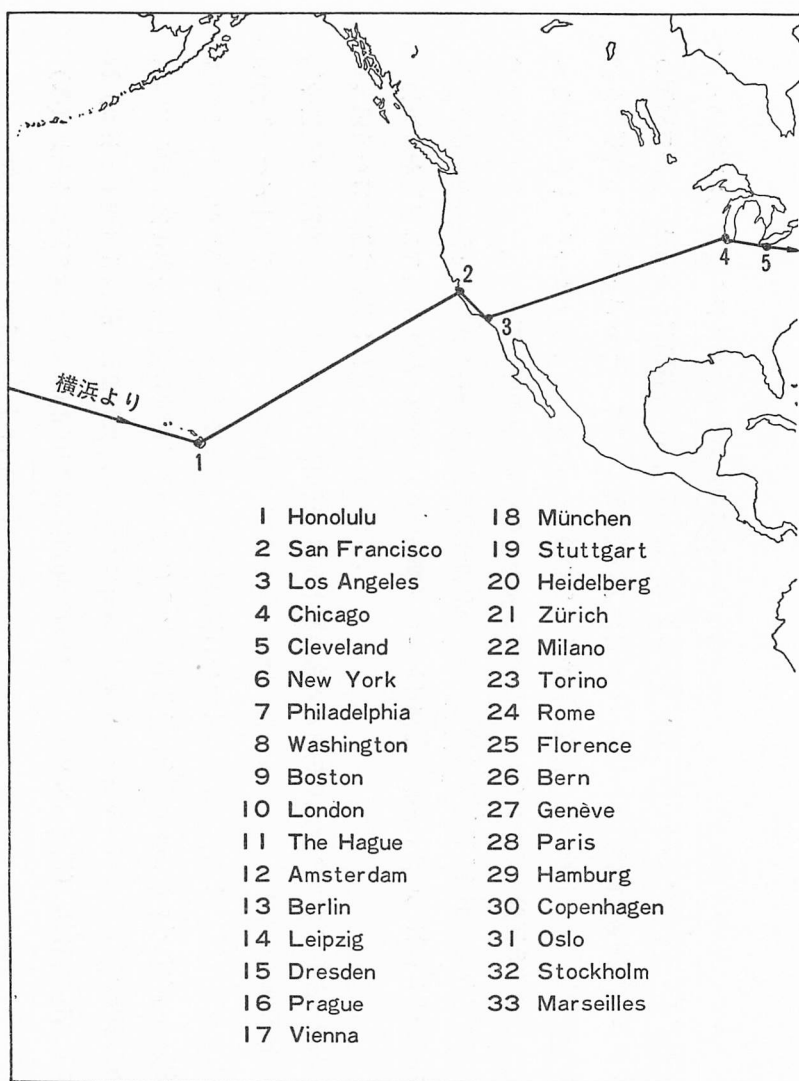
これに氣を得た丸善は、その独自の見解により、海外取引先との交歓並に外国の商業状況視察のため欧米視察員を派遣することになり、取締役八田庄治と書籍部長伊藤四良の兩人を選んだ。二人は昭和六年五月七日、横浜解纜の秩父丸に乗り、ホノルルを経由して五月二十日サンフランシスコに到着した。その後、ロスアンゼルス、シカゴ、クリーブランド、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントン、ボストン等を訪問し、七月二十三日にはロンドンに到着した。滞英一か月半余りで、更に長驅して欧州大陸に渡り、オランダのヘーグ、アムステルダムを経てドイツに入り、ベルリン、ライプツヒ、ドレスデン等に遊び、その間ブラーグ、ウィーンを訪れ、再び戻ってミュンヘン、スツツガルト、ハイデルベルヒ、スイスのチューリッヒ等を視察した。その後イタリーに入り、ミラノ、トリノ、ローマ、フロレンスの古跡に杖を引き、反転して再びスイスのベルン、ジュネーブを探訪して、パリに赴いた。滞巴期間約半か月、充分に鋭氣を養った結果、新たに笈を負うて北行し、ハンブルグからデンマークに渡り、ノルウェーに入りオスロ、ストックホルムを巡り、再びベルリンに戻り、十二月十一日マルセーユ出帆の白山丸に乗り、翌七年一月十四日、八か月の旅を終え、無事神戸港に帰って来た。

彼らが欧州各地を巡遊中に満州事変（六年九月十八日）が起り、これに伴う満州国撤兵勧告案が国際連盟の理事会に上程され、わが国の全権団（芳沢謙吉駐仏大使・松平恒雄駐英大使・佐藤尚武駐白大使）の反対があるにも拘わらず、十月十二日の再開理事会で十三対一の絶対多数で可決してしまった。そこでこのような政治上の問題が会う人ごとの話題として上ったが、勿論彼らには的確なニュース源をもっていなかったから、それに関する知識は欧米人並みであった。ただこれがため今回の海外派遣の主たる目的である取引先との親善・交歓が疎外されはしないだろうかという懸念もあったろうが、幸いにして事変発生直後、英国が金輸出再禁止を断行し、米国内にも深刻なパニックが起り、欧米諸国ともその影響を可成きびしく受けた時であったから、むしろ関心は経済問題に集中する傾向があった。八田庄治は、昭和七年一月十五日付の「神戸又新日報」に帰朝談を載せ、欧米の出版界が経済不況の影響を切実にうけて、大量出版を一時差し控え、廉価版・普及版の出版に力を入れていると語っているのは、洋書輸入専門店の重役としては当然のことで、実業家の見た欧米経済界のありのままの姿の叙述は、むしろ好感が持たれる。尚、兩人共著の「米國瞥見記」と題する小冊子が昭和九年五月に印刷され関係者に配布されたが、予定された「歐洲瞥見記」は、遂に刊行されずに終った。

ところで、「米國瞥見記」は、四六判（B六相当）一二八頁の小冊子であるが、見聞した処を要領よくまとめ、時に戯談や皮肉などを交えた好読物で、また時には快気炎を挙げているが、そのうちでも「かの国学ぶに足らず」と喝破した痛快な記事があるから、次にこれを掲げて見よう。



米欧巡遊図



八田・伊藤

七月一日（水）暑熱（華氏九十五度）

（略）取引先訪問の後、我国外遊者の噂に上るBrentano's（ブレンタノ書店）を視察した。間口十二間位、地階（日本の一階）は文具、内地出版書、一階（日本の二階）は輸入書を陳列。係に聞くと美術及び児童用書の或種には輸入税を払ふが一般は無税であると、この点前に述べたのと多少相違してゐる。輸入書の陳列には大体分類して居るが棚には分類表示板がなく、客の質問により一々答へると云ふ。（略）地下室は内外の雑誌を多数陳列して一冊売をしてゐる。外に国内出版の赤本多数、奥にカウンターがあり Subscription Dept.（雑誌予約部）と掲示してある。此店は地下室、地階一階を併せての広さ、凡そ我社の店頭、階上階下全部である。要するに自国物赤本の山であるに過ぎない。

米人は専門家だけが Serious Books（重要書籍）を読んで発明、創案に資し、大衆は唯機械にこき使はれてゐるのである。随って大衆の仕事は無味乾燥を免れないから、勤労時間後の彼等はひたすら歓楽を追はざるを得ないやうになり、逆も肩の凝る本など手にする気にはなれないものらしい。我国の所謂洋行帰りがブレンタノの大を称ふるのを屢々耳にしたけれども、我等の目から見れば大したことはなく、結局輸入書店としては断然我社が世界一と言つてよい。此の点世界に誇るべしである。然り而して我社が多大の犠牲を払つて日本文化の躍進に寄与しつつある功績に對して、願くは大方の識者が更に認識を深められたいものである。（略）
以つて自信満々、商魂のたくましが窺えるではないか。